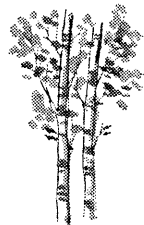


ヨーロッパの旅 (五)

ロンドンでの四日間は、今回もまた私の心を分裂させた。いたい、ロンドンの正体はどこにあるのであろうか？ この思い出は、五年前に来た時にも、十五年前に来た時にも、私の心を占めた思いと同じであった。

ビカデリーサーカスに群をなすビートルズたち、ほかの国々では見ることのできないほど多くの超ミニスカートの女性たち、ホテルの従業員の支配的な態度、滑稽味にあふれた衛兵交替、美しく広い三つの公園などが断片的に目にうかんでくる。期待に反して少なくなったのは、イギリス銀行の周辺のイギリス紳士——すなわち、シルクハットやトップハットをかぶり、白い手袋を片手に、新聞とこうもり傘を小脇にかかえ、周囲の人々を鼻にもかけず歩いていく姿であった。しかし、何人かのそうした紳士に会うことができた。昔と全く同じ姿で、一人は著しく背が高く、一人

平井信義



は太った紳士であった。ロンドンでのこのような諸々の姿や光景が、どのように調和しているのであろうか？ 調和があるとすれば、それは何を意味しているのであろうか？

三日目の午前を、私は、リジェンツ公園とケンシントン公園の散策に当てた。地下鉄でBBC放送局の脇に出て、懐しいチバ製薬会社のホテルの前に出た。このホテルには、ちょうど十五年前に、一〇日間ほど泊めてもらっていたのである。無料であったから、貧乏な留学生であった私には、何よりもうれしいことであった。部屋は小さかったが、小ぎれいで、白いカーテンに降り注ぐ戸外の緑が美しかったのを、今もなお思い出すことができる。食堂には四つ〜五つのテーブルがあり、そこで朝食をとるのであったが、イギリス以外の外国人が多く、私もその一人であった。イギリスふうの朝食で、マーメレードがおいしかった。

玄関の扉は重く、それを力づくで押しは出入りした。その扉は、今回もまた全く同じであって、私はその扉を押して中に入ってみたくはなほどである。しかし、当時の若い給仕の女性などはいるはずがない。その顔も思い出せない。十五年の歳月は、人の姿をすっかりかえてしまっているであろうが、扉は全く変わっていないかった。

その扉を振りかえり振りかえり、私はリジュンツ公園の方へほぼっていった。道は、だからだと傾斜している。十五年前に、この道を毎日のように歩いたものである。留学も最後のコースになって、ロンドンからバリー、ローマ、アテネ、カイロー——と南廻りで帰国する旅程のスタートがここであつたが、すでにズボンはやれよれになり、Yシャツも洗濯に洗濯を重ねて黒くなり、襟の型もすっかりくずれていた。しかし、何でも見てやろう、何でも経験してやろう——という若い意気込みにあふれていたから、そのような姿もおかまいなし——という風態であつた。しかし、英國紳士の間にはさまつたりすると、威圧を感じないわけにはいかなかった。それと同時に、それをはねかえすような気魄があつた。今の私は、すでに髪には霜がおり、老眼鏡を用いる年齢になつている。そして、古い日々のことを懐想することの多いヨーロッパ旅行になつている。

リジュンツ公園に入ると、美しい芝生が続き、人影もまばらで

あつた。私はベンチに腰をおろし、芝生の上にもえ立つ空気の動きを、右に左に追いやりながら、時間にこだわらず、体を休めることにした。居眠りがでてきたら、それに身をまかしてもよい——そんな気持であつた。二〜三羽の鳩が舞いおりてきて、私の足もどの方へ、もの欲しげな目をして近寄ってくる、それを追うようにして何羽かの鳩が次々と羽音を立てて舞いおり、鳩の群は次第に私を囲むようになった。私は、ポケットを探したが、何も食糧がない。「何にもないよ」と日本語で鳩に話しかけたが、首をさしのべるようにして、二〜三羽が更に近寄ってくる。手を大きく開いてみせると、その動きに、何羽かの鳩が飛びのくと、ほかの鳩も後ずさりするようにして、再び飛び立っていった。

背のまがった年寄りだが、杖をひきながら、入口の方から歩いてきて、私の坐っているベンチの一方の隅に腰をおろすと、手さげ袋から紙包みを出した。その途端に、すさまじい羽音を立て、何十羽となく鳩が舞いおりてきてその老婆を、取り囲んだ。紙包みの中から取り出され、ばらまかれるパン屑をめがけて、競うようにして鳩はつついた。何回か、同じようにパン屑が投げられると、その度に羽音は右に左に動いた。遂に、包み紙についていたパン屑が払い落されると、鳩への食糧は尽きた。それでもなおもの欲しげにうろろと老婆のまわりにいる鳩の群をみて、「もうおしまいなのね」というような表情をして、私の方を向いて笑

顔でウィンクをした。私も、笑顔をかえすと、ひと言、ふた言何か言ったが、私にはききとれなかった。別に私に向かって言ったようでもなく、鳩に向かって喋ったようでもなかった。それでいいのだろう。八〇の齢いに耐えてきた老婆のモノローグと云うべきであろうか……。一人身のひと時の幸せなのであるか……。きょうまで、どのような幸せを追い求めて生き続けたのであるか？ 私自身も、人生の三分の二を生きてきたが、これからの三分の一は、死への歩みを着々と続ける生活である。これから先、どのような幸せを求めて、死への歩みを続けていこうとするのであろうか？ これまでの人生の中の幸せは、いったい何であったろうか？

子どもたちの幸せのため——と想って仕事をしてきたが、それが本当に子どもたちの幸せに通じていたであろうか？ 頭の中ではそれを願いながらも、実践がそれに追いついていたであろうか？ 頭の中での願い——といっても、それが果たして本物であったろうか？ 多くの子どもたちのために、本物の幸せを保障し、それを自分の実践の中ではっきりと実現するためには、これからどのような生き方をしたらよいのだろうか？

ふと見ると、老婆はベンチにうずくまりながら、目をつぶって、居眠りを始めたようであった。動かない姿が、九月の陽射しを浴びて、その影を私の方に投げかけていた。私は、そっと音を

立てないようにベンチから腰をあげた。

再び地下鉄にのり、マーブルアーチにいった。そこがケンシントン公園の北隅に当たる。彼方の林がけむるほど広々した公園である。中に入ると、折たたみ式の椅子がそこに並べられていて、すでに何組かの家族がその椅子で円陣を作り、弁当を取り出して食事をしていた。そのまわりを幼児たちが走り廻ったりしていた。ズックの椅子に背をもたせ、本を読んでいる若い女の子もいた。私も、椅子の一つを移動させて、太陽の方に向けて位置を定め、それに深々と腰かけた。軽い疲れが私をとらえていた。目をつぶった。落ちつくくと、ゴーっという音が私の耳をとらえた。

ロンドンという都市の音であった。乗物の動き廻る音で、動いている間は、気づかない音であった。遠くから、近くから、その音は私に襲いかかってくる。疲れたからだを次第に包み、私をとりこにするとともに、頭の牙えを招くような音であった。この音は、東京でもしばしば聞いた。

特に、朝早く起きて書きものをしている時、次第に私の耳に響いてくる音と同じであった。ゴーっという音。この音の中に、私は何十年も暮らしたのだと思うと、それを余り気にしないできた自分の神経が、いったいどのようになっているのだろうか——と訝った。澄んだ音をきく耳を失ってしまったのではないだろうか？ 都会で育っている子どもたちの耳もまた、このような雑音

の網を通してもの音をきいているのではあるまいか？ この音はいわゆる近代文明を代表したモンスターのようなものではあるまいか？ 私は、改めて、子どもたちに、田園の生活をじゅうぶん味わわせたいと願ってきたことの意味を感じた。

いつの間にか、私も居眠りをしたらしい。救急車のサイレンの音で、我に返った。時計をみると、正午近くになっていた。周囲を見廻すと、幾組かの家族の円陣が変わっていた。三〇分以上も居眠りをしていたのであった。恐らく、今回のヨーロッパ旅行の中で味わった初めての居眠りであり、快いものであった。私は、背伸びをして立ち上がると、明日はこのロンドンをたつて、パリへ飛ぶのだ——と、未練の残るモズレー病院の見学ができなかったことを思い返しながら、芝生に細くついている小道を歩き始めた。

あちこちとロンドンを歩き廻っている間に、超ミニスカートの女性の写真を次々と撮影した。あとで集めてみると二〜三〇枚以上になったほどである。最も保守的なイギリス女性が、このようなスタイルをしていることを、皮肉な気持で眺めようとする私の心が、このようにたくさん写真を撮るようになったのである。イギリスの紳士と対比させて考えてみたかった。ピートルズの写真も二〜三〇枚になるが、これも、同じ気持から出発している。しかし、それは、私の心の中の対立でもあった。

私の心の中には、古いものを大切にし、その型を守ろうとする気持が強い。しかし、古いものには型があり、それが強い力をもっている。その型は、しばしば形骸となり、精神を見失ったものになる恐れがある。精神に新しい息吹を与えるためには、形骸を破らなければならぬ。形骸を打ちこわさなければ、新しい精神の息吹がほとばしり出ることができないような面がある。しかし、この形骸を破ることは大変なことであり、その反動が強くなると、全く新しい型をもち込まなければならなくなる。しかし、私には、新しい型にもなじめない面があるのだ。新しい型には、古いもののよさが全く失われてしまう恐れがあるからである。古いもののよさと、新しいもののよさとを、どのように調和させたらよいのであろうか？ このことは、今度のヨーロッパ旅行でも、しばしば私の頭を占める課題であった。

同じことが、子どもの教育についてもいえる。子どもの教育の中には、古い型のものがたくさんにある。型だけの教育が行なわれていて、その精神がすっかり見失われている場合が少なくない。古い保育者の中には、その型を大切に守っている人があり、それに対して若い保育者が反発している。何とかして古い型を破って、新しい息吹を保育の中にとり入れようとし、対立が生じていることも少なくない。しかし、古い保育者には、新しい型にな

じめずにいるし、古いものよさを手離したくないという気持ち強い。古い時代の保育のよさと新しい時代の保育とを、どのように調和させて保育を実現したらよいのであろうか？

ロンドンのミニスカートは、私にとっては今更のように驚きであり、興味の対象となった。膝上一〇センチに驚いたのは一昨年渡欧した時のことであったが、今回のロンドンのものは、膝上三〇センチで、ちょうど子どものスポンのような感じがする。それがまた、実に美しい。美しさを感じる時のその女性の足が、実に見事であった。足というものが、こんなに美しいものかと、今更ながらのように思い返されるのであった。そうなる、足に美しさのない女性のミニスカートには、やはり目をそむけたくなるものがあるのに気づいてきた。そうなる、わが国の女性には、ミニスカートが向くであろうか？

ミニスカートに見慣れてくると、長いスカートが妙に思われてくるのも不思議である。ミニスカートが多い中で、長いスカートがやばったく思えてくるのは、集団の力というものであろうか。数の多さが、一つの力となって、数の少ない者に対する見方を成立させていく。われわれの研究でも、その点で考えなければならぬ面がたくさんにある。子どもの一つの行動の基準が数の多さに求められることが少なくない。数が多い方が正常となり、数の少ない方を異常としてしまうことがしばしばある。それが真実で

あろうか。

保育の中でも、子どもの行動に対する見方が、数の多さから成り立ることがある。おとなしい子どもが多い時には、少し元気のよい子どもが二三人いると、その子どもたちの行動が攻撃的な行動とみられたり、おちつきのない行動のように思えてくる。殊に、一つのクラス、一つの園のみでなく、わが国の子どもも多くが示す行動がおとなしいものになってくると、暴れん坊やいたずらっ子は、異常行動の持ち主のように見られてしまう。このようなことから、子どもの評価に当たってどのような基準を用いたらよいかが問題になってくる。基準は、その時々々の文化的背景から、相対的なものになってしまふ恐れがある。絶対的な基準を立てるにはどのようなしたらよいであろうか？

ロンドンの滞在は、モズレー病院の見学ができなかったことから、公園にいたり、ミニスカートやビートルズを追って過ごす結果になった。しかし、私の日本の生活の中で、このような社会の動きの中から、いろいろなものを考える余裕がなかったことを反省させられ、大いに楽しむことになったのである。昨日も、たくさんさんのスライドをスクリーンにうつしては、その当時のことを懐しく思い返したのである。